

# OG訪問

40周年記念編  
看護福祉学部看護学科

今回は特別編として、2004年に行われた本学創立30周年記念「高校生健康エッセイコンテスト」で最優秀賞に輝いた松井優佳さんを訪ねました。当時高校3年生だった松井さんは、翌年本学へ入学、現在は看護師として活躍中です。

市立札幌病院(札幌市) 看護師

松井 優佳 さん(看護福祉学部看護学科2009年3月卒業)



## 高3でエッセイを書く

松井さんと本学のご縁は10年前。2004年8月、看護師を志す受験生だった松井さんが本学への資料請求で創立30周年記念事業「高校生健康エッセイコンテスト」を知ったことに始まります。松井さんには書きたいテーマがありました。大好きなおばあさまとの関わりを通して感じ、考えてきた「健康」「幸せ」です。推敲を経て応募した作品『祖母から学んだこと』は、最終審査員5人のうち4人が最高点を付け、見事最優秀賞に輝きました。高齢者の幸せな生き方という重いテーマに気負うことなく自然体で向き合い、素直な文章でまとめた作品でした。

最優秀賞の受賞を知ったのは新聞紙上だったといいます。「母と『発表、今日だったね』と話しながらめくった朝刊に私の名前が載っていて、びっくり!午後になって受賞を知らせる速達と大学からの電話を受けて、ようやく実感が湧きました」と笑いながら振り返ります。

本学のオープンキャンパスにも参加して、自由な雰囲気や日常的にある他学部との交流に魅力を感じていた松井さんは、この受賞をきっかけに本学を第一志望に決め、翌春、看護学科へ入学しました。



89歳になったおばあさまと松井さん。認知症は進んでも明るく生きる姿はいまも人生の師。大学の4年間、おばあさまがデイケアに通う施設でボランティアを続けた松井さんを「孫なのよ」と周囲に誇らしげに紹介していたそうです。



大学の老年看護学実習ではひな祭りを企画。参加者が一体になれるよう工夫を凝らした取り組みは、実習先の病院、先生から高く評価されました。

## 本学で看護を学ぶ

おばあさまとの温かい関わりの中で体験から多くを学び、本当の健康、本当の幸せを考え、実践するケアという明確な理想をもっていた松井さんは、本学で出会い、学び、楽しむ4年間を過ごしました。吹奏楽部では学部を越えた仲間をつくり、老年看護学ゼミでは熱い思いを共有する仲間、さまざまな理想を体現して示してくれる先生方と出会えたといいます。さまざまな病院で看護師として働く大学の同期とは、卒業後5年を経ても月に1度は集まって食事をしているそうです。

「自慢の母校です」と松井さん。「実際に働いてみて、看護の仕事は感性が問われるのだとわかり、それがちゃんと大学で磨かれてきたと気づきました。技術は練習を積めば獲得できますし、遅れても頑張りを取り戻せますが、自由な発想や豊かな感性は多彩な経験の中でしか身につかないものです。医療大学の先生

方は、課題は出しますが、自分たちで調べなさい、考えなさい、やってみなさい、と見守って下さいました。グループワークも多く、視点や思考の多様性を知り、尊重し合う大切さも知りました。大学で身についた調べる力、考える力、発想する力、協働する力に、いま、とても助けられています」。

## 看護師になる

現在、松井さんは市立札幌病院の腎臓内科・呼吸器内科・血液内科の混合病棟の看護師です。53床ある病棟にドクター11人、看護師は28人、薬剤師が3人います。日々の看護は病棟の患者さん全員が対象ですが、常時2、3人の患者さんの担当看護師として看護(指導)計画を作成し管理しています。

看護の根底にあるのはおばあさまが教えてくれた「幸せ」。担当患者さんの多くは退院後も通院と自己管理が必要ですが、「病があっても健康的に」、前向きに暮らせる支援を考えます。終末期の患者さんには、いま生きている喜



松井さんが声をかけると、病棟師長(前列右から3番目)もドクター(男性全員)も、多忙なか、快く撮影にご協力くださいました。みなさん松井さんのエッセイのことは「初耳!」だったそうです。



担当患者さんの退院に向けた生活指導をする松井さん。「傷が治る過程がわかる外科のように目に見えた変化に乏しいと思われがちな内科ですが、看護師の介入による患者さんの内面的変化はしっかりと実感できます。やりがいです」。

びを感じられるようにできることに取り組みます。今年松井さんは、酸素ボンベを離せない終末期の患者さんの「外出したい」という思いを、主治医やチームメンバー、リハビリスタッフと連携しさまざまな課題を越えてかなえました。「病院の周りの散歩や近くのショッピングセンターへの外出でしたが、久しぶりのショッピングに患者さんが満面の笑みで『最高です』とおっしゃってくれました。最初から不可能だと決めつけないことの大切さをこのケースで教えられました」。

## ■ 極めるために

病棟で担当することの多い腎臓疾患の患者さんのために専門性を高めたいと、松井さんは自ら希望して年に2回、腎臓疾患関連の学会で最先端を学んでいます。今年度から腎臓内科の患者さんを中心としたチームのリーダーも務めるようになりました。勤務先は腎臓移植手術数で全国トップクラスの実績をもつ病院ですから、「いつか移植の分野でも働いてみたい」という意欲もぞかせます。

自ら機会をつくり、前進している松井さんに、エッセイを書いた当時の自身の変化を尋ねてみると、笑いながらこう答えてくれました。「変わっていないです。友だちにも全然変わらないねといわれます。あえていえば、10年前は看護師をめざしていたのが、いまは実際に看護師として働いていることです

ね」。大学進学、就職と大きな出来事を経験しながらも、確かな「軸」があるから右往左往することのない10年間だったようです。

「祖母の介護が原点です」(松井さん)。高校生の時のエッセイに表れていた他者の人生への温かいまなざしは、いまは、看護の仕事として表現されています。



ナースステーションでのカンファレンス。「情報共有はもちろん、小さなことでも一人で考えずに相談します。異なる経験や視点が思いがけない解決策に導いてくれるたび、看護は一人ではできない仕事だと感じます」。松井さんの右は今年本学を卒業した阿部千紘さん。セミの後輩です。

## ◆ 10年前に書いたエッセイ

### 北海道医療大学創立30周年記念事業 高校生健康エッセイコンテスト《最優秀作品》

#### 祖母から学んだこと

北星学園女子高等学校 (北海道) 松井 優佳

私には現在七十九歳の祖母がいる。八年前、私たちは祖母と一緒に暮らすために祖母の家を増築して引っ越してきた。

祖母は、住み慣れた土地を高齢になってから転居してきたために、それまでと同じ様な近所付き合いができなくなってしまい、寂しそうにしていた。そのような祖母を両親は心配して、区役所に相談に行ったところ、家から一番近いデイグリーネンというデイケア施設に通ったらどうかと薦められた。いつも家族の後ろをついて歩いていた祖母が、実際デイケアを見学してみて自分も参加したいと言った。デイケアでは、自分の趣味であるお花や陶芸をしたり、友だちとの交流を楽しむことができ、最初は週に一回の通所であったはずが、いつのまにか週五回まで増えていた。

祖母は軽度の痴呆症である。そのため、自分の身の回りのことを全て自分一人ではできない。私の父は毎朝祖母を起こしに行く。母はデイケアに行くまでの準備を手伝い、家の片付けなどをする。私は毎晩祖母に会いに行き、今日あったことなどの話をし、明日の予定と夕食後の薬を飲み忘れないかの確認をする。私の弟は、一緒に外出した

時など足の悪い祖母が歩行に困難を感じていたらさりげなく手を差し伸べている。私達家族は、祖母の痴呆症を進行させないためにも、自立を促す手助けを考えている。

現在祖母はデイケアに行くとなると、化粧などの身支度を整え張り切って出掛けて行く。以前は消極的だった祖母が、沢山の人と触れ合うことで意思表示をしっかりとし何ごとにも積極的になった。祖母は自分の家が一番だと言っている。私達家族はいつまでも祖母が楽しそうに自宅からデイケアに通ってもらいたいと思っている。

何気ない言葉一つが喜びに繋がることも悲しみに繋がることもあるということ、相手が何を求めているのか、どんな些細なことでも相手のためになるかを考えて手を貸すことなど、祖母の介護を通して沢山のことを学ぶことができる。これらの経験は、私が将来進みたい道にとっても役に立つ宝物になると思う。

デイケアは沢山のスタッフや多くのボランティアによって作られている。デイケアが主催する行事に私も参加させてもらったが、皆が楽しめることを皆で作っているのだなと実感した。人はいくつになっ

ても人と人の繋がりが大切なもので、人は人によって支えられているのだと思う。

何一つ不自由のない生活だけが本当の幸せなのだろうか。祖母はいつも自分は幸せだと口にしていて、自分が幸せだと思えることが健康であることなのかもしれない。充実した生活を送ることで幸せを感じることができて、それが健康であることにも繋がっていくのではないかと私は思う。またそれは、沢山の人の手によって作られていることも忘れてはいけない。



エッセイコンテスト表彰式で当時の学長・廣重力先生より表彰状を受け取る松井さん。コンテストには全国から720名の応募があり、松井さんの最優秀賞1点の他、優秀賞8点が選ばれました。

